

Title	ドロシー・コウ著(小野和子・小野啓子訳), 『纏足の靴：小さな足の文化史』
Sub Title	Dorothy Ko, Every step a lotus : shoes for bound feet, Japanese tr. by Kazuko Ono, Heibon sha, 2005
Author	五味, 知子(Gomi, Tomoko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2007
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.75, No.2/3 (2007. 1) ,p.153(333)- 162(342)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070100-0153">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20070100-0153</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドロシー・コウ著（小野和子・小野啓子訳）  
『纏足の靴—小さな足の文化史』平凡社、二〇〇五年

五味 知子

一

本書は Dorothy Ko, *Every Step a Lotus: Shoes for Bound Feet* (Berkeley: University of California Press, 2001) の日本語訳である。これまでの纏足研究では、纏足は女性の身体を傷つけ、行動を制限する風習と見なされてきたため、纏足を行う主体は男性と考えられていた。その中では、纏足の起りは男性の性的嗜好や女性を籠居させたという願望のためであり、纏足の衰退は男性の意識が「近代化」したためであるという説明がなされていた。これに対し、本書は足そのものではなく、美しく刺繍された纏足靴に光を当てること、女性を主体とした纏足史」を描き出した。

本書の中には、著者が自分の家族について語った非常

に印象的な一節がある。「私の母は湖南省の人だったが、窯業を営む中流の家庭に生まれ、その母つまり祖母が家族みんなのために靴を作るのを見て育った。六〇年の歳月を隔てて母は今もその作り方—木綿を重ね、ごはん糊をたっぷり塗って厚く丈夫な靴底を作り、次に千枚通しで靴底に穴をあける、という靴作りの過程を思い出すことができる」（九六頁）。近年、日本においては特に纏足反対運動に関する実証的な研究が進んでいるが、女性を主体として纏足をとらえた研究はほとんど見られなかった。評者の祖母が下駄で通学し、デパートに入るときには下足番に下駄を預けて足袋で歩いたように、数十年前まで下駄や草鞋、果ては裸足で歩いていた日本人にとっては、夜も足を布に包み続ける纏足は奇異に思われ、どのようにしてそのような不自由な風習を女性に強要し、

受容させたかといった視点を抱きがちである。著者は纏足が廃れた後に生まれた世代ではあるが、彼女の祖母の世代が纏足で街を歩く姿を見かけることはさほど珍しくはなかったはずである。そのような文化背景を持つ著者にして初めてなした、女性を中心とする纏足研究の完成を喜ぶたい。

本書の著者ドロシー・コウ氏は、香港出身の、アメリカを研究拠点とする華人研究者である。中国女性史、ことに知識人女性の歴史に造詣が深く、一七世紀江南の上流社会の女性たちが創造した女性文化を描いた著書や纏足に関する著書、さらには研究論文があり、そのいずれにおいても、前近代の中国女性は文化に対して単なる受身の存在ではなく、むしろその担い手であったという姿勢を貫いている。<sup>(1)</sup> 本書でも、著者は「女性文化」の観点から、纏足靴の作り手であり履き手でもあった女性たち自身が靴に込めた思いを汲み取ろうとしている。本書の構成は以下のとおりである。なお、コラムは「」で示した。

## 序章

イメージの力

たくさんの意味

たくさんの理由

テクストとしての靴

## 第一章 纏足の起源

埋葬された靴

中国のシンデレラ

「葉限、中国のシンデレラ」

香しい閨室の詩

ダンス、ダンス、ダンス

音楽は続く

## 第二章 結ぶもの

「儒教の家族観」

「古代の十二支の動物たち」

男の世界で娘として生きる

「女性が実権を握る中国の家」

女になる

纏足がうまくゆきますように

一足歩めば蓮の花

女の一生

## 第三章 働く身体

女性の手

「蚕の娘の伝説」

靴を作る

刺繍は芸術

靴のファッション

足を作る

#### 第四章 靴は語る

靴は魔術師

視覚的なあそび―靴に見られる幸福のシンボル

さまざまな地方文化

「広東人の纏足靴」(ダグラス・D・L・チョン)

纏足靴の意味

#### 第五章 新しい世界

外国人の見た纏足 はだかの足

纏足反対運動のなかで

新式の靴

海を渡った纏足靴

古い靴 新しい意味

本書は縛られて変形した足そのものではなく、靴に注目することに大きな特徴がある。また文字ではなく

「物」に示された文化、すなわち「物質文化」(material culture) という観点から纏足靴を分析することで、今までの文献中心の纏足研究に疑問を提示しようとする。以下、その内容を章別に要約する。

#### 二

第一章の《纏足の起源》では文学や出土物から纏足の起源を探る。纏足に至る段階はいくつかに分けられる。まず、三―六世紀にかけて、詩の中で女性の美が表現され、その中でも次第に足が目されるようになる。文学と実際との両面で足とセクシュアリティとの関連が強まったのが九世紀である。葉限という女性を主人公にした中国のシンデレラ物語には、足とセクシュアリティの関係がはっきりと示されている。また、中央アジアの踊りが女性の官能性を提示し、足を縛ってその優美さを強調したことによって、ダンスの世界でも足に新たな魅力が加えられた。ダンスのたどたどしくゆったりしたステップは女性の官能性のアピールと結びついていったが、やがて性的な意味合いを薄め、家庭的な価値へと変わっていく。南宋の墓の発掘によって、一三世紀の初めまでには南方の沿岸都市で高級官僚の妻や娘が纏足を行っていた

たことが確かめられた。出土した靴はよく知られた一九世紀の纏足靴とは違って、比較的大きく、つま先が跳ね上がる形をしていたが、足を布で包み、アーチ型をしたものを履くという点では共通していたのである。

第二章の《結ぶもの》では、女性たちが纏足を通じて家族や友人と結ばれていた様子を明らかにする。父系家族においては、理論的に言えば娘が両親からよそ者扱いされる。しかし、大多数の娘たちの体験はそれとは異なり、両親は娘を大切に育んだ。貴族制を宗とする唐代社会では結婚にあたって血統が最も重んじられたが、宋代になると花嫁の個人的な資質が大切になってくる。一三世紀から一五世紀にかけて纏足が広がったのは、娘に良い結婚をさせたいという家族の願いゆえであり、その際、纏足は性的な魅力を添えるというよりは花嫁の謙譲と勤勉の象徴として受けとめられたのである。娘に纏足するのは母や祖母であり、男性は一切関わらなかった。母親は纏足の成功と娘の幸せを願って、吉日を選び、神へ祈りを捧げてから纏足を始め、靴作りを娘に教えた。作った靴は針仕事の腕前を示すために婚約先に送られたり、またコミュニケーションの手段として家族や友人への土産や贈り物にされたりした。纏足には「女性は身体のある

り方によってのみ権力を得ることができる」(七二頁)ことを娘に教える意味があり、纏足の痛みは出産の痛みに通じるものだった。母親は纏足を通して娘を女に育てあげたのである。

第三章の《働く身体》では、纏足の女性が労働に携わっていたこと、纏足そのものも女性の労働の上に成り立っていたことを述べる。靴作りは女性の大切な仕事であり、纏足の靴や足は女性の技術や労働の表現であるといえる。木製の靴型と特殊な皮細工を必要とし、専門の職人が拵えるヨーロッパの靴と異なり、中国では男女の靴はともに絹または綿製で、女性の日常的な手作りによっていたため、女性の作る靴はその女性の道徳的・経済的価値を表現していた。良き女性は自らの手と体を用いて、紡ぎ織り、縫ったのである。一八世紀になって、綿業が普及すると、女性が部屋の中で紡織をして金を稼ぐことが可能になり、纏足がそれまでよりも下層へ、中国中心部から周縁部へと広がった。また、纏足そのものも女性の日々の手仕事や手入れの上に成り立っていた。足が纏足特有のアーチを形成するまでには、長い年月にわたる手入れが欠かせなかったし、纏足を美しいものにするにはその足だけでなく、刺繍の靴やレギンス、アンクレッ

トなどの装いの助けが必要であった。

第四章の《靴は語る》では、靴を通して纏足の背景となった文化について分析する。靴は女性たちを代弁し、彼女たちの属していた地方文化や国の文化についても語っている。纏足は単に足底を短くするものではない。纏足は三次元の寸法を操るもので、その重点は足そのものよりも靴と外見にある。靴には視覚的なあそびがほどこされており、靴の上部と靴底のデザインのモチーフは中国の民衆文化、民俗芸術を表現している。また、靴のスタイルは地方の文化や生活を物語っている。例えば、北部では据え置き型のベッド（炕）の上にみんなで腰を下ろして暖を取りながら過ごす時間が長いいため、靴底の見える機会が多く、そのため靴底の装飾に工夫が凝らされた。交通の不便な内陸部や台湾ではほとんどの靴が自家製木綿で作られたが、商業の盛んな地域では木製のヒールや既製品のリボンなどが用いられた。纏足靴は作り手の芸術的才能と技術を証明するだけでなく、地方の芸術的伝統と地方文化の不可欠な一部でもあったのである。

第五章の《新しい世界》では「近代化」とともに纏足の意味合いが変化し、纏足の習慣が衰退する様子を描く。スコットランドの旅行家、ジョン・トムスンが纏足の素

足を撮影し、出版したことで、人々の視線は纏足の靴から素足の肌と骨に移り、纏足は「伝統」の悪しき代表になった。一九世紀後半から二〇世紀初頭には纏足解放運動が起こったが、纏足の運命を変えたのは纏足反対キャンペーンよりも、むしろ纏足そのものの公開であった。その結果、沿岸都市では纏足が急速に終息したものの、他の地域ではなかなか消えなかった。「解放」されることを拒んだ女性たちは、自分の身体についての外部からの指示や国家の私生活への介入に抵抗したのである。彼女たちを「解放」しようとする人々は、彼女たちをあたかも役立たずの怠け者か障害者でもあるかのように見なした。しかし、当時働いていたのは纏足した農婦であり、足の大きな近代女性は都市のダンスホールや映画館で遊んでいた。中国本土で纏足が衰退する一方では、海外では纏足靴の歴史に新たなページが加えられた。それまで「文化」と認識されることになかった纏足が、海外において「中国文化」とみなされるようになったのである。その影響の下、中国本土においても纏足靴の蒐集とアンティーク市場が始まった。

最後に、著者は自らの立場は中立ではないと宣言する。纏足の意義をひとつにまとめることはできないこと、私

たちが纏足をしていた女性たちとまったく異なつた時間と空間を生きているということ認めつつも、著者は纏足と女性文化を研究してきた歴史家として、「纏足は愚かな破壊行為ではなく、女性自身の目から見て意味のある行為であつたと私は信じる」(一六九頁)と述べているのである。

三

本書の目的は「纏足の起源と一九世紀以前の普及の歴史を、女性文化および物質文化の視点から明らかにし、より示唆に富んだ新たな纏足像を提示する」(一九頁)ことである。本書は身体加工、女性文化、物質文化、民俗文化など様々な論点を孕み、その意義は歴史研究にとどまらない。評者はその全般にわたつて論評をすることはできないため、特に歴史的観点から所感を述べることにしたい。

本書が評価されるべき点は三つあると考える。第一は、出土した靴や博物館が所蔵する靴の写真を掲げ、靴を中心に纏足を扱うことよつて、纏足が当時の女性たちに美しいものとして捉えられてきた理由を現代の私たちにもわかるように示した点である。これまで纏足は足を歪

める痛ましい習慣とされ、その裸足や変形した骨格に目が向けられてきたが、纏足をする女性たちにとっては、むしろその痛みの代償を払つてでも美しさを追求する行為だったのである。著者は纏足の靴に施された華やかで意味合い豊かな刺繍のモチーフや、目の錯覚を利用して足を小さく見せる仕組み、脚部を装うレギンスやアンクレットなどを紹介して、女性たちの美意識を示して見せた。身体感覚という一見「自然」なものが実は社会的要素に左右されていることは近年の研究で明らかになってきている。足を縛り変形させることに不自由さや痛みしか感じられない現代の私たちに、自らの足を縛り、愛する娘の足を縛つた、かつての中国の女性たちの感覚を伝えようとした本書はその点で非常に挑戦的な試みといえる。

第二は、纏足靴の地域的多様性や時代変遷から、纏足の意義は一つではなく、時代や地域、階級によつて異なつていたことを明らかにした点である。纏足は女性の足を不自由にして、家に籠もらせるための習慣と言われてきたが、本書は初期の纏足は舞踊から始まり、足を不自由にするものではなかつたこと、上流社会の女性たちの習慣となつてエロチックな意味が薄まつたこと、一八世

紀に棉業の普及や織機の普及とともに、より広い階層の女性に受け入れられたことなどを解き明かした。纏足靴という日常的に使われてきた「物」を通して、文化や社会といった大きな対象を描く手法は新鮮であり、新たな側面から中国女性史にアプローチしている。

第三は、纏足をする理由を男性ではなく、女性に求めた点である。著者は、「纏足は男性が女性を家に閉じ込めておくためにしたのだ」、あるいは「女性の足に対する男性のフェティシズムが纏足を生み出した」というこれまでの纏足の説明を覆し、纏足を行ったのは女性であるという観点から新たな説明を施した。顧みられることが少なかった纏足の日常性を説明し、エロチックな観点や痛ましさを離れて、現実に纏足を行い、娘の足も縛った女性たちの意識を見直した。これまでの研究で纏足の足をどのように縛るかというテクニカルな説明はなされてきたが、本書では母親が吉日を選び、神に祈りを捧げてから娘に纏足を施すという、纏足の精神性と、それによって結ばれる母娘の絆を描き出した。また、纏足靴の贈答が女性たちのコミュニケーション手段であったことも、これまでの研究では述べられてこなかった側面であり、本書の真骨頂である。

次に疑問点について記しておきたい。

第一は、著者の提示する「女性文化」は階級を越えた共通性を持ちうるのか、という点である。著者は前著 *Teachers of the Inner Chambers: Women and Culture in Seventeenth-Century China* (Stanford, California: Stanford University Press, 1994) において一七世紀の知識人女性の連帯を示し、「女性文化」について明らかにしたが、それはあくまで詩画に通じた教養ある女性の文化であり、農民や商人の女性には共有されていない。纏足は上層の女性から始まって、次第により一般的な風習となったが、本書に収められているような刺繍モチーフや凝った纏足スタイルは女性全体に共有されたのだろうか。収録された靴の写真を見るかぎり、どれも相当の時間と技術を要する細かい細工がされており、またその靴の状態は極めて良好なものである。靴の博物館に収められているところからしても、実用的な普段履の靴というより、自己の高い技術を誇示する意味合いをもった靴や芸術性の高い靴の可能性が高い。使われる布地などの質には差があっても、「纏足靴を作る技術自体は階級や地域の違いを越えて同じだった」(一〇二頁) としているが、「その日暮らしに近い家族にとつて、娘の纏足は毎月の収入のすべ



てをはき出すほどの物入り」(七五頁)であり、「刺繍は、たんに娘が母から学ぶ技術ではなく、士大夫階級の女性が夢と感情とともに自分たちの世代から次の世代へと伝えていく女性文化のいわば水路のようなものだった」(一一〇頁)とすれば、本書で展開された靴の文化論はどのあたりの女性たちに共有されるものであったのか。

第二は、纏足によって結ばれる女性の連帯があった一方で、纏足によって女性が分断される構図もあったのではないか、という点である。娘に纏足を施すことは、育ちや躰の良さを示すことであり、その意味で、纏足は母から娘へ受け継がれるステイタスシンボルであったとも言える。地域や時代、民族によって纏足に対する感覚は異なっていたとはいえ、纏足と「女性らしさ」が結びついている人々の間の意識においては、纏足という行為が女性の連帯にかえって亀裂をもたらしたとも考えられる。つまり、纏足なしでは「女性らしさ」を十分に備えていないとみなされ、育ちの良い「女性らしい」女性と大足の女性というように、女性が分断されていたということもあったのではないか。

第三に、「女性文化」は男性中心の文化とどういう関係にあるのかの説明が不十分な点である。著者は纏足が

女性に痛みを与え、歩行を困難にすることを前提としつつも、なお当時の社会において理にかなった行為であったとしており、「男性中心の世界で女性の身体をもって生きた女性たちにとって、ごく当たり前のこと」(二六頁)と述べているが、その理由は明らかにされていない。「女性のコミュニティはまったく見えないわけではなかったが、男系中心の家族構造の影に隠れていた」(七五頁)というように、著者の唱える「女性文化」は男性中心の家族構造の中に存在していたものであり、纏足も男性の目や意識と切っても切り離せない関係にある。家庭内における女性独自の文化があるとすれば、それは男性中心の文化とどのような関係を取り結んでいたのか。女性の目から纏足を見直す試みは意義深いが、纏足をめぐる中国の女性文化と男性文化との関係について説明が乏しい点は惜しまれる。

第四は、靴や足に関する中国特有の感覚をどのように説明するか、という点である。これまでの研究が纏足のエロチックな意味合いを非常に強調してきたことへの疑問から、著者は多くの女性の日常的装いとして纏足を捉えなおそうとし、その道徳的な意味合いを強調したが、そのためにかえって中国における足の性的意味合いや靴

作りの情緒的な意味合いについて知る機会を逃してしま  
った感が否めない。清末の曾国藩の娘は一週間の日課を  
決めて家事を行い、その成果は家長の点検を受けること  
になっていたが、家長であつてもおそらく女性の靴を見  
ることをはばかったと見えて、女性の靴は点検を免除さ  
れた<sup>(2)</sup>。このような靴作りに対する感覚の時代変遷を追う  
ことができれば、非常に面白いのではないだろうか。ま  
た、本書では女性の靴のみに焦点が当てられており、男  
性の靴については、それが女性の手によって日常的に作  
られるということしか述べられていない。ジャネット・  
タイスは、女性は家族の男性の靴を作ることがほとんど  
であり、他人の男性の靴を作つてやることは、不適切な  
ほど親密な男女関係を連想させるといふ事例を紹介して  
いる<sup>(3)</sup>。男性の靴を作ることによって女性が男性に愛情を伝える  
ことができるという点は、靴作りの重要な意味といえる  
のではないか。

#### 四

本書は纏足をめぐる女性の精神的側面を描きだしたが、  
「一双の小脚、一缶の涙」といふ言葉に象徴されるよう  
な纏足の苦痛を否定しえたわけではないため、女性が苦

痛を代償としても纏足をしようとした理由や、なぜ身体  
の中でも特に足に意味が付与されたのかという点で、や  
や疑問が残るといえるだろう。しかし、女性文化として  
の纏足という新しい観点と、纏足を包む美しい靴の世界  
は非常に魅力的である。序にあるように、本書はもとも  
と、著者がカナダ・トロントのバチャ靴博物館で監修し  
た「清末の中国における女性の生活と靴」という展覧会  
に合わせて書いたものであるため、一般の読者にもわか  
りやすい形で、著者の豊富な知識が提示されている。そ  
の意味でも本書は中国女性史に関心を抱く者にとって必  
読の書といえよう。本書を手がかりにして中国女性史の  
研究が一層進展することを期待する。また、このような  
研究書が原書出版後数年で、小野和子・小野啓子両氏の  
力によって平易で明瞭な日本語訳を得られたことは誠に  
喜ばしい。著者は本書の後に *Cinderella's Sisters: A Revi-  
sionist History of Footbinding* (Berkeley: Los Angeles;  
London: University of California Press, 2005) を発表し、  
さらに専門的な議論を展開している。併せて一読するこ  
とを勧める。

注

(1) 著書の纏足に関係する主な著作を以下に掲げる。

*Teachers of the Inner Chambers: Women and Culture in Seventeenth-Century China* (Stanford, California: Stanford University Press, 1994).

秦和子訳「中国・明末清初における纏足と文明化過程」『アジア女性史—比較史の試み』(明石書店、一九九七年)。  
坂本葉子訳「中国の衣服と体のイメージ—十六世紀から十九世紀におけるヨーロッパ人の旅行記から」『論集中国女性史』(吉川弘文館、一九九九年)。

“In Search Footbinding’s Origins”『唐宋女性与社会』北京大学盛唐研究叢書(上海:上海辞書出版社、二〇〇三年)。

*Cinderella’s Sisters: A Revisionist History of Footbinding* (Berkeley: Los Angeles; London: University of California Press, 2005).

(2) 野村鮎子「曾国藩の末娘の婚姻と家庭—曾紀芬『崇徳老人自訂年譜』を読む—」(『女性史学』七号、一九九七年)、二頁および注七。

(3) Janet M. Theiss, *Disgraceful Matters: The Politics of Chastity in Eighteenth-Century China* (Berkeley; Los Angeles; London: University of California Press, 2004) pp.158-159.

(附記) 本稿は平成一八年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。